

# ドイツ語の分離前綴りにおける接辞性と接語性

## Properties as Affixes and Clitics of German Separable Particles

横山 昇汰  
YOKOYAMA Shota

This paper discusses aspects of affixes and clitics on separable particle in German. Separable particles are attached to verbs to form separable verbs, in which affixes and stem in the main clause normally separate without auxiliary verbs. Therefore, separable particles are often regarded as words. Meanwhile, this investigation shows that while separable particles can be treated as affixes, they also show properties of middle elements between affixes and clitics. For this investigation, we contrasted separable verbs in German and phrasal verbs in English. In addition, we contrast separable verbs with [*N-suru*]-verbs in Japanese and examine behavior of separable verbs and separable particles from the perspectives of phonology, morphology, syntax, and semantics. Middle elements between affixes and clitics have been reported in Amis in Taiwan and Polynesian languages. Similarly, separable particles in German can be regarded as middle elements between affixes and clitics based on several aspects of the behavior of separable particles.

キーワード： ドイツ語，分離前綴り，分離動詞，接辞，接語

Keywords: German, Separable particles, Separable verbs, Affixes, Clitics

### 0. はじめに

本論では、ドイツ語の分離動詞を構成する分離前綴りの接辞的性質と接語的性質について、英語、日本語との対照および分離動詞のふるまいを観察ことで分析を行っていく。

以下 1 節では、分離動詞における分析として、服部(1950)および中村(2013)を概観する。続く 2 節では、本論における議論に向けて、分離動詞がどのような環境において分離・移動するか、あるいは分離・移動の現象がみられないかについて触れる。3 節では、本論での議論に当たり、接辞と接語という二つのカテゴリーについて対照し整理する。4 節では、分離動詞の句的側面について観察し、英語の句動詞、日本語の「N する」型複合動詞との対照を行う。5 節においては、分離動詞が全体として一つの語としてふるまう場合について

て観察を行い、分離前綴りがもつ形態的・統語的性質についてみていく。6節においては、分離前綴りの位置づけを行うにあたり、接辞と接語の連続性についてみていく。7節では、これまでの議論をふまえ、語の定義と分離動詞の性質を照らし合わせ、分離動詞の一語性を検討し、分離前綴りを接語的な接辞として位置づけを行う。なお本論では、ドイツ語の分離動詞における接辞的要素の性質を検討するにあたり、誤解を避けるために「接辞」と呼ばず、ドイツ語学の名称に倣い「分離前綴り」と呼ぶこととする。また、本論において語としての一体性を示す性質について、「語性」と呼ぶこととする。

## 1. 分離動詞に関わる先行研究

分離動詞に関わる先行研究には、服部(1950)および中村(2013)が挙げられる。服部(1950)は、自立形式と附属形式における議論において、分離動詞が分離・移動する点を指摘し、分離動詞を二つの語からなるとしている<sup>1</sup>。服部(1950)は、自立形式と附属形式を区別する特徴として、三つの原則を示している。このうち原則二として「結びついた二つの形式が互いに位置を取りかえて現れ得る場合には、両者ともに自由形式である。(服部 1950: 15)」と指摘する中で、ドイツ語の分離動詞を例に以下のように述べている。

ドイツ語の「分離動詞」、たとえば *anfangen* 〈始める・始まる〉は、正書法では一続きに書かれるけれども、

• *Wir fangen unsere Arbeit an.* 〈我々は仕事を始める。〉

のように *an* と *fangen* との間に外の単語が現れるばかりでなく、両者の位置までが入れ替わることがあるから、疑もなく二つの単語である。

服部(1950: 16)

服部(1950)は以上のように述べており、語幹と前綴り部分が分離・移動する点から両者を語として分析している。

中村(2013)では、分離動詞が語としての一体性を有するかどうかといった点で議論を行っている。中村(2013)は、正書法や文法書の記述をもとに分離動詞の一体性について論じている。中村(2013)では、Fleischer & Barz (1995)における語と句の区別にかかわる議論を引

<sup>1</sup> 分離動詞を派生語として語として扱わない考えは、ドイツ語学の中でも見られ、中村(2013)では、「包括的な文法書では、1つの動詞カテゴリーとして扱われないのが普通である。(中村 2013: 45)」と述べられている。実際、Grebe (1966)および Paul & Stolte (1962)においては分離動詞が動詞の一つのカテゴリーとしての記述がみられない。

用し、意味的、音韻的一体性から分離動詞が全体で一つの語になっているとしている。Fleischer & Barz (1995)は、以下のように述べており、二つの語から構成される場合と一語としての一体性をもつ場合では、意味的にも音韻的にも異なる特徴を示すとしている。

Als Hilfe für die Bestimmung der WBK werden die teilweise auch hier bestehenden Akzent- und Bedeutungsunterschiede zwischen WBK und Wortgruppe genutzt<sup>2</sup>. Die verbale Zusammensetzung trägt in der Regel nur einen Hauptakzent und eine neue Gesamtbedeutung, die sich gegenüber der Bedeutung der Wortgruppe durch eine stärkere “inhaltliche Verschmelzung” der beiden Konstituenten auszeichnet: *zusammenkommen* ‘sich versammeln’, *zusammen kómmen* ‘gemeinsam kommen’<sup>3</sup>.

Fleischer & Barz (1995: 22<sup>4</sup>)

中村(2013)は、Fleischer & Barz (1995)における議論などにより、分離動詞における語性として意味的・音韻的な一体性がみられることを認めている。一方で、正書法の観点から語幹の語頭が大文字で書かれている点や、常に分かち書きされるケースを挙げ、分離動詞が語であるとするのは難しいとしている。しかしながら、中村(2013)における分離動詞の語性に関する議論は、文法書や正書法の規則などの記述をもとに行われており、分離動詞の実例を分析していない点で検討が不十分であるといえる。次節では、3節で分離動詞の語性を分析するにあたり、分離動詞の種類観察と分離動詞の分離規則について概観する<sup>5</sup>。

<sup>2</sup> ここでの‘Wortgruppe’は、句に相当するといえる。Fleischer & Barz (1995)は、‘Wortgruppe’について形態法上で扱われるべき語形成、すなわち ‘Wortbildung’ との対比として次のように述べている。

「hierin liegt eine gewisse Parallelität zur Konstruktion von syntaktischen Wortbildungen (Wortgruppe) und Sätzen, und damit ist eine Beziehung zur Syntax gegeben.” 統語的な語形成(句)と文における構造に対しては、統語法との関係が与えられているという点で類似性がみられる。(Fleischer & Barz 1995: 1)」なお、Fleischer & Barz (1995)における ‘Wortgruppe’ は ‘syntaktischen Wortbildungen’ であると述べられているものの、ここでの意味は影山(1993)における「統語的派生(影山 1993: 255)」とは異なるものである。この点について詳しくは、Fleischer & Barz (1995: 22)における ‘WBK’ と ‘Wortgruppe’ の違いに関する説明を参照されたい。

<sup>3</sup> WBK=Wordbildungskonstruktion (中村 2013: 47)「語形成構造」のこと。

<sup>4</sup> 中村(2013: 48)に同様の箇所が引用されている。

<sup>5</sup> 中村(1995)では、分離動詞とされるものの中により語に近いものから、慣用句的なものまで存在すると指摘しており、分離動詞は語と句の間で連続的な広がりを持つとしている。本論では、紙幅の関係上すべての種類の分離動詞について言及することはできないため、より典型的な分離動詞として、Fleischer & Barz (1995)が挙げる次のような前綴りを持つ分離動詞について検討を行っていく。Fleischer & Barz (1995)は、分離動詞を派生する接辞として、「ab-, an-, auf-, aus-, bei-, ein-, los-, nach-, vor-, zu-」を挙げている (Fleischer & Barz 1995: 329-342)。

## 2. 分離動詞の分離規則

分離動詞は、補助動詞と共起しない主節において語幹と分離前綴りが分離・移動する<sup>6</sup>。

- (1) Anna spricht Freundin von ihm an.  
アンナが友達に話しかけている。
- (2) Fingen Sie das Werk an?  
仕事は始めましたか？
- (3) Wo steigt er den Zug aus?  
彼はどこで列車を降りるのですか？

さらに、法助動詞と共起する場合や従属節内に置かれる場合、分離動詞は分離・移動せず、形態的な緊密性がみられる。これらは、平叙文だけでなく疑問文や命令文においても同様に観察される。

- (4) a. Meine Schwester muss den Fluss über-setzen.  
私の姉は船で川を渡るに違いない。  
b. \*Meine Schwester muss über den Fluss setzen.
- (5) a. Ich denke, dass meine Schwester den Fluss über-setzt.  
私は、姉が川を渡っていると思っている。  
b. \*Ich denke, dass meine Schwester setzt den Fluss über.

ドイツ語の分離動詞は完了構文や受動文に置かれた場合、haben, sein, werden といった補助動詞と共起するが、この場合接辞 ge-による分断を受ける。さらに、zu 不定詞節を形成する場合は、zu による分断を受ける。

- (6) Paul hat heute nicht das Werk an-ge-fangen. 〈完了構文〉  
パウルは今日、その作業を始めなかった。
- (7) Die Bücher wurden von Hans ein-ge-kauft. 〈受動文〉  
その本は、ハンスに売られた。
- (8) Haben Sie das Werk an-ge-fangen? 〈完了構文〉  
作業は始めましたか？

---

<sup>6</sup> 補助動詞を含まない文について、議論を円滑にするため、分離動詞が補助動詞などと共起せず単独で用いられる構文という意味で本論では以降「単独構文」と呼ぶ。

- (9) Ich glaube, dass Hans und Anna gestern nach Berlin ab-ge-fahren. 〈完了構文〉  
私は、ハンスとアンナが昨日ベルリンを出発したと思っている。
- (10) Es freut mich, Sie kennen=zu=lernen. 〈Zu 不定詞節〉  
あなたと知り合うことができうれしいです。
- (11) Bist du bereit ab=zu=fahren? 〈Zu 不定詞節〉  
出発する準備はできたか？

なお、zu 不定詞節に分離動詞が置かれた場合でも、補助動詞と共起する場合は、主文と同様な現象が観察される。つまり、完了構文や受動文を形成する場合には過去分詞を形成する接辞 ge-による分断を受け、法助動詞と共起する場合には zu による分断を受けず、分離動詞が分離・移動しない。

- (12) Ich habe vergass, dass ich die Tür zu-ge-macht zu haben.  
私は、ドアを閉めたことを忘れていた。
- (13) Es war Wunsch von Hans, Leute in Japanisch an-sprechen zu können.  
日本人に話しかけることがハンスの望みだった。

これら分離動詞の分離規則について、分離・移動する場合を「○」、分離するものの移動はしない場合を「△」、分離も移動もしない場合を「×」としてまとめると、以下のようなになる。

表 1 分離動詞の分離規則

	主節			従属節	Zu 不定詞
	平叙文	疑問文	命令文		
単独構文	○	○	○	×	△
完了構文, 受身文	△	△	—	△	△
法助動詞を伴う文	×	×	×	×	×

次節では、分離動詞と分離前綴りの性質について議論するにあたり、形態法で扱われる拘束形態素である接辞と統語法上で扱われる拘束形態素である接語に触れていく。

### 3. 接辞と接語の相違点

形態法において扱われる要素は、大きく自由形態素と拘束形態素の二つに分けられる。

自由形態素は、単独で語を形成することが可能であり、単独で発話される。拘束形態素は、単独で語を形成することはできず、常に語の一部として現れる。後者の典型例としては、接辞が挙げられる。拘束形態素の中ではさらに、形態法のレベルで扱われる接辞と、拘束形態素からなるにもかかわらず、統語法上で語としてふるまう接語というカテゴリーが存在する。接辞と接語における相違点としては、Aikhenvald (2002)や Zwicky & Pullum (1983)、Zwicky (1985)において議論されており、江畑(2022)においても言及がある。形態的・統語的な観点から接辞と接語を区別する際には、形態法のレベルで扱われるか、統語法のレベルで扱われるかという違いが生じるとされ、概ね似たような見解が示されている。Aikhenvald(2002)および Zwicky & Pullum (1983)では、より詳細に両者の違いについて述べている。これらの主張のうち、本論における分離動詞および分離前綴りの分析に関わる項目についてまとめると、以下の表ようになる。なお、参考として語の性質についても載せておく。

**表 2 語、接語、接辞の性質対照**

	語	接語	接辞
単独発話	○	×	×
アクセントを持つ	○	×	×
意味の変化を起こす	—	×	○
語幹選択性	—	×	○
統語法で扱われる	—	○	×
形態法で扱われる	—	×	○

Aikhenvald (2002)および Zwicky & Pullum (1983)によれば、接辞と接語の違いは、扱われるレベルが形態法か統語法かという違いだけでなく、付加された場合に意味の変化を引き起こすかという点や、特定の種類の語幹のみに付加されるかという点を挙げている。接語は語形成の終了した語や句、品詞の種類に関わらずに付加されるのに対して、接辞は特定の語幹に付加され、異なる品詞や句などに付加されないとしている<sup>7</sup>。接辞と接語は異なるカテゴリーとされているものの、6 節でみるように連続的につながりがみられる場合もある。ここまで本論での議論に当たり、接辞と接語という二つのカテゴリーの性質について

<sup>7</sup> Aikhenvald (2002)は、句や文に付加される点を接語の特徴として挙げている。日本語においても、接語と考えられている「は」が「走行中に運転士に話しかけることは、危険ですのでおやめください。」のように「こと」で導かれる節に付加されることが観察される。Zwicky & Pullum (1983)では、接語が屈折した語に付加され得ることに触れ、英語の補助動詞において、非省略形がすでに接語を含む句に付加される一方で、省略形では不可能な点を挙げ、接語が統語法で扱われるとしている。

整理した。次節では、分離動詞の句的な側面についてみていく。

#### 4. 分離動詞の句的側面

分離動詞は、服部(1950)において分離・移動する点から二つの語からなるとされている。分離動詞について観察すると、以下のように単独構文中の主文において分離・移動することが分かる。

(14) Wir fangen heute das Fest an.

私たちは今日お祭りを始める。

(15) Hans und Anna tragen Leute in Not bei.

ハンスとアンナは困っている人を助けている。

(16) Hans macht die Licht auf dem Tisch mit seinem Hand aus.

ハンスは自分の手を使って机の上の電気を消した。

ドイツ語の分離動詞は、動詞要素からなる語幹と前置詞由来の要素などからなる前綴りから構成される。似たような構成を持つものとして、英語の句動詞が挙げられる。英語の句動詞は、動詞と不変化詞から構成されるとされている<sup>8</sup>。英語における句動詞は、ドイツ語と同様に不変化詞と語幹動詞の間に語を含むことが可能である。しかしながら、ドイツ語が前綴りと語幹の間に複数の語を含むことができる一方で、英語の句動詞では副詞を含むことができない点や、二つ以上の句を含むことができない<sup>9</sup>。

(17) a. Someone often takes away the book.

b. Someone takes the book away often.

c. \*Someone takes often away the book.

(18) a. John often picks up his friend with his car.

b. John picks his friend up often with his car.

c. \*John picks often up his friend with his car.

(19) \*John often picks his friend with his car up

<sup>8</sup> 英語の句動詞を構成する不変化詞について嶋田(1985)では、語形変化しない点で副詞であるという点を認めつつ、句動詞における不変化詞が位置や状態の変化を表しうる語であると述べ、完全に副詞と同義でないと主張している(嶋田 1985: 7)。本論はこれに従い、不変化詞の用語を用いる。

<sup>9</sup> アメリカ・インディアナ州ブルーミントン出身の筆者の友人による内省では、句動詞の間に副詞を含むことは文法的に許容されない一方で、“take the book away”のように名詞または「所有冠詞/冠詞+名詞」を含むことは可能である。なお、“Someone takes the book in library away”など、名詞修飾句を含む場合も可能である。

ドイツ語の分離動詞と英語の句動詞は、動詞からなる語幹と不変化詞からなる前綴りという構成を取る点で似ているものの、ドイツ語の分離動詞は単独構文の主節において制約なく語や句を含むという点で、これらに制約のある句動詞とは異なる。このような点から、ドイツ語の分離動詞は服部(1950)が指摘するように二つの語からなるようにみえる。

続いてドイツ語の分離動詞と日本語の「N する」型複合動詞との対照を行っていく。日本語の「N する」型複合動詞は、名詞(N)と動詞「する」からなる複合動詞である。この構成を持つ動詞には、「勉強する」「読書する」「発表する」などが挙げられる。これらの複合動詞は、「勉強をする」「読書をする」「発表をする」などのように、名詞要素と「する」の間に「を」を入れた形も存在する。影山(1993)は、語の性質として四つの制約を挙げているが、「N する」の形を語とし、「N ヲする」の形を句であると認めている。その根拠として、「N する」では共通する要素である「する」を省略して複数の複合動詞の名詞要素を照応することができないという点を挙げている。

(20) 夏休みには、兄は海外に旅行し、弟は富士山に登山した。

→\*兄は海外に旅行、弟は富士山に登山した。

(21) 司法試験に兄は落第し、弟は合格した。

→\*兄は落第、弟は合格した。

影山(1993: 261)

一方で「N ヲする」においては、名詞要素の省略とゼロ代名詞による照応が行われているという点や、重複した際に「N (ヲ) する」全体ではなく「する」のみが繰り返される点を句であるとする根拠として挙げている。

(22) アメリカ人はよく発言するが、日本人はしない。

(23) 運動している人としていない人との違いは年をとってから分かる。

(24) 母は、内職いしい、私を大学に入れてくれた。

(25) ウサギは、飛びはね飛びはね、帰っていった。

影山(1993: 262-264)

(26) アメリカ人はよく発言をするが、日本人は pro しない。

影山(1993: 263)

影山(1993)は、「N ヲする」を句とし「N する」を語とし、生成文法的な観点からこれら



は統語的派生の関係にあるとしている。

日本語の「N する」型複合動詞におけるこうした議論を踏まえたうえでドイツ語の分離動詞について観察を行うと、日本語の複合動詞とは異なり、ゼロ代名詞による照応ができないことが分かる<sup>10</sup>。

(27) a. Hans fing die Sitzung an und Anna fing den Dieb ein.

b. \*Hans fing die Sitzung an und Anna \_\_\_\_\_ den Dieb ein.

c. \*Hans fing die Sitzung an und Anna (machtet/ tat) den Dieb ein.

d. \*Hans fing die Sitzung an und Anna hielt auf dem Straße so.

(27b)は、共通する動詞要素を省略し、ゼロ代名詞によって照応されている例、(27c)は共通する動詞要素を形式動詞で照応している例、(27d)は共通する分離前綴りを so によって照応させている例である。(27)にみられるように、ドイツ語の分離動詞は語幹と前綴りのどちらも省略したり他の要素によって照応することができない。さらに、ドイツ語の分離動詞においては、日本語の「N する」型複合動詞のように統語的派生が認められない。これは、前置詞と同形の分離前綴りについて、前置詞が用いられた文と分離前綴りが用いられた文で同じ意味が生じないことからわかる<sup>11</sup>。このような点から、ドイツ語の分離動詞が二語からなる句であると認めることは難しいといえる。

(28) Hans fing an der Sitzung. (≠Hans fing der Sitzung an.)

ハンスは会議で掴んだ。(≠ハンスは会議を始めた.)

(29) Paul machtet zu das Licht seines Zimmers. (≠Paul machtet das Licht seines Zimmers zu.)

パウルは自分の部屋の電気に対して作った。(≠パウルは部屋の電気を消した.)

本節では、以上のようにドイツ語の分離動詞と英語の句動詞、日本語の「N する」型複合動詞との対照を行った。これらの対照から、ドイツ語の分離動詞は英語の句動詞と比べ

<sup>10</sup> 例文の判定は、ドイツ・バーデン＝ヴュルテンベルク州フリードリヒスハーフェン出身の筆者の友人の内省に基づく。

<sup>11</sup> 日本語の「N する」複合動詞では、ヲを含む形でも含まない形でも、基本的に意味は変わらない。このことから、ドイツ語の分離動詞と日本語の「N する」動詞は形成過程が異なるといえる。

ると一見して二語からなる句である一方で、日本語の複合動詞との対照において、省略や照応が不可能な点で語である可能性が示唆される。次節からは、ドイツ語の分離動詞が語としてふるまう場合について詳しくみていく。

## 5. 分離動詞の語的側面

### 5.1. 分離動詞における形態的緊密性

前節では、服部(1950)における分離動詞の性質に関する主張を概観したうえで、分離動詞の句的側面について観察した。しかしながら、分離動詞は構成要素の省略や照応ができない点で句として分析するのは難しいといえる。本節では、分離動詞が語的にふるまう事例について観察していく。

分離動詞は、単独構文の主節において分離・移動するという性質を示すが、法助動詞と共起する場合、以下のように語幹と前綴りを分離することも移動することも不可能になる。

(30) a. Meine Schwester muss den Fluss über-setzen.

私の姉は川を渡るに違いない。

b. \*Meine Schwester muss über den Fluss setzen.

c. \*Meine Schwester muss den Fluss setzen über.

(31) a. Anna will Freundin von ihm an-sprechen.

アンナは友達に話しかけるつもりだ。

b. \*Anna will an Freundin von ihm sprechen.

c. \*Anna will Freundin von ihm sprechen an.

(32) a. Er soll sein Auto an-halten.

彼は自分の車を止めるべきだ。

b. \*Er soll an sein Auto halten.

c. \*Er soll sein Auto halten an.

分離動詞が法助動詞と共起する場合、(30b) (31b) (32b)のように前綴りと語幹の間に語を含むことはできない。さらに、(30c) (31c) (32c)のように位置を取りかえることもできない。影山(1995)では、語に対する性質について述べるにあたり、四つの制約を示している。このうち、「語彙照応の制約 (影山 1995: 11)」については前節で触れた。(30)~(32)の事例においては、さらに「形態的な不可分性 (影山 1995: 10)」がみられる。これは、語に操作を加えて分断したり移動したりすることが不可能であるという点を指摘したものである。分離動詞は法助動詞との共起において、統語的に分断したり移動したりすることは不可能であることから、語としての性格を示しているといえる。続いて、分離動詞の意味的一体性

についてみていく。

## 5.2. 分離動詞の意味的一体性と意味派生

Fleischer & Barz (1993)は、語と句の違いとして、意味的な一体性について触れている。Fleischer & Barz (1993) は、同じ要素から構成される語と句のペア‘zusammenkommen’ ‘zusammen kómmen’を示して、両者が異なる意味を生じているとしている。‘zusammenkommen’では構成要素の意味が融合的であり、意味の一体性がみられるのに対して、‘zusammen kómmen’では構成要素の意味が分析的で、意味の一体性がみられないとしている。Zwicky & Pullum (1983)では、英語の否定表現‘n’t’について分析を行っており、法助動詞の否定形が特別な意味を派生することについて言及している。Zwicky & Pullum (1983)によれば、‘can’の否定形において、単に二つの要素‘can’と‘not’が共起した場合と‘cannot’および‘can’t’の間には、意味的な相違が生じているとされる<sup>12</sup>。

分離動詞について観察を行うと、以下のようなになる。なお以下の分離動詞は、より日常的に用いられる頻出の語から抜粋した<sup>13</sup>。

**表 3 分離動詞と構成要素の意味の対応表**

分離動詞	分離前綴り (意味)	語幹 (意味)	分離動詞の意味
ábfahren	ab (出発・分離)	fahren (乗り物で行く)	出発する
ánfangen	an (接近・開始)	fangen (つかむ)	始める
áufmachen	auf (上方へ)	machen (する, 作る)	開ける
áusmachen	aus (外へ, 除去)		消す
éinkaufen	ein (中へ)	kaufen (買う)	売る
úmziehen	um (周囲, 変更)	ziehen (引く)	引っ越す, 着る
vórstellen	vor (前へ)	stellen (立てる)	紹介する
zúmachen	zu (閉鎖)	machen (する, 作る)	閉める

分離動詞は、前綴りと語幹となる動詞から構成される。表2を見ると、分離動詞は前綴りの意味と語幹の意味が分析的ではなく、意味の一体性がみられる。例えば、‘anfangen’

<sup>12</sup> Zwicky & Pullum (1983)は、以下を挙げて(i)では「出席しないこと」が許されるのに対し、(ii)では「出席が許されない」という意味が生じるとしている (Zwicky & Pullum 1983: 509)。

(i) A good Christian can nót attend church and still be saved.

(ii) A good Christian {cánnót / can’t } attend church and still be saved.

<sup>13</sup> これらの語は、信岡, 荻原(2016)による独検対策単語集において、5級から3級レベルの語として掲載されているものである。検定の5級から3級は日常会話レベルの語彙が頻出することから、一般的な分離動詞として分析の対象とした。

‘aufmachen’ ‘vorstellen’では、前綴りと語幹のそれぞれの意味が分析的に現れておらず、全体でひとつの新たな意味を生じている。Fleischer & Barz (1993)では、意味的な一体性がみられることを語の性質として挙げ、Zwicky & Pullum (1983)では、融合的で特別な意味が派生する点を派生語としての特徴として挙げている。この点から、分離動詞が語である可能性が考えられる。次節ではさらに、統語的・形態的な観点から分離動詞の語性についてみていく。

### 5.3. 非分離前綴りを含む分離動詞

前節までは、分離動詞が形態的緊密性を示す事例、意味的・音韻的な一体性を示す事例についてみてきた。本節では、非分離前綴りを含む分離動詞について観察し、分離動詞における形態的緊密性についてさらなる検討を行う<sup>14</sup>。

ドイツ語の分離前綴りと非分離前綴りは、語幹となる動詞に対し同時に付加されることがある。付加される事例として、「非分離前綴り-分離前綴り-語幹」の構成になる場合と、「分離前綴り-非分離前綴り-語幹」の構成になる場合のどちらも許容される。後者のように分離前綴りがもっとも外側に付加される場合には、通常分離動詞と同様に単独構文の主節において分離・移動する性質を示す。一方で、前者のように分離前綴りが非分離前綴りと語幹に挟まれる構成になる場合、分離前綴りの分離・移動は見られない。

- (33) Ich ver-ab-schiede mich von meinem Sohn und hoffe, daß er meinen Wink verstanden hat und sofort bei seiner Frau anruft. (*Ladylike*)
- (34) Er sah die Glocke, doch der Anblick be-ein-druckte ihn nicht. (*Die Arbeit der Nacht*)
- (35) An diesem Abend ver-nach-lässigte David vielleicht ein paar Gäste. (*Lila, Lila*)
- (36) ..., und er be-auf-tragte ihn mit der Errichtung des die Linden abschließenden Tores, das in der Planungsphase, nach dem Vorschlag des Königs, Friedenstor hieß. (*Unter den Linden*)
- (37) Zum 50. Todestag Friedrichs' untermauerte der Historiker Wolfgang Leonhard die Mordthese mit neuen Quellen und ver-an-lasste die sächsische Landesregierung, das Dresdner Hannah-Arendt-Institut für Totalitarismusforschung mit der Erarbeitung einer Expertise zu beauftragen. (*Die Zeit*, 20.01.2000, Nr. 4)

(33)~(37)は、単独構文の主節において、分離前綴りが非分離前綴りと語幹の間に現れる事例である。同様の環境において通常分離動詞は、分離前綴り‘ab-, ein-, nach-, auf-, an-’を語幹から分離し、文末に配置するといったふるまいを示す。一方で、(33)~(37)の事例に

<sup>14</sup> 非分離前綴りとは、ドイツ語学において動詞から分離・移動しない派生接辞のことを指す用語であり、典型的な接辞である。

おいては、分離前綴りが語幹から分離したり、移動したりといった現象は見られない。非分離前綴りと語幹の間に分離前綴りが生じ、前綴りの分離・移動がみられない事例は、単独構文だけでなく、以下のように過去分詞を形成する場合や、zu 不定詞節を形成する場合にもみられる。これらの環境では通常、過去分詞を形成する接辞 *ge-* や *zu* 不定詞を形成する接語 *zu* による形態的な分断がみられる<sup>15</sup>。しかしながら非分離前綴りに分離前綴りが後接する場合、*ge-* や *zu* による分断は見られない。

〈過去分詞の場合〉

- (38) a. »Am liebsten würde ich einen Detektiv be-auf-tragen«, sagt Anneliese, (*Ladylike*)  
 b. \*Am liebsten würde ich einen Detektiv beauftragt.
- (39) Henderson war be-ein-druckt, doch Hitler war für ihn »eine Art von Dr. Jekyll und Mr. Hyde« – und so rückte er in seinen Memoiren die Prioritäten zurecht: (*Kultur und Politik*)
- (40) Das Grab ist nicht nur nicht ver-nach-lässigt, sondern im Gegenteil gepflegt und mit frischen Blumen geschmückt. (*Die Liebesblödigkeit*)
- (41) Bei der Diskussion des kontroversen Themas »Adenauer und Deutschland« darf die Sichtweise der DDR nicht ganz ver-nach-lässigt werden. (*Anmerkungen zu Adenauer*)
- (42) Nahira hat sie be-auf-tragt. (*Skogland*)

〈Zu 不定詞の場合〉

- (43) Sie ist gekommen, um sich von mir zu ver-ab-schieden. (*Wörterbuch*)  
 \*Sie ist gekommen, um sich von mit verabzuschieden.
- (44) Es scheint sie wenig zu be-ein-drucken. (*Ladylike*)
- (45) Sobald wir in Gera druckten, könne die Zeitung genügend Anzeigen aufnehmen, ohne den Text zu ver-nach-lässigen. (*Neue Leben*)
- (46) Zum 50. Todestag Friedrichs' untermauerte der Historiker Wolfgang Leonhard die Mordthese mit neuen Quellen und veranlasste die sächsische Landesregierung, das Dresdner Hannah-Arendt-Institut für Totalitarismusforschung mit der Erarbeitung einer Expertise zu be-auf-tragen. (*Die Zeit*, 20.01.2000, Nr. 4).

以上のように分離動詞における分離前綴りは、常に分離・移動する性質を示すのではな

<sup>15</sup> Zu 不定詞を形成する *zu* は、単独で発話されない一方で、統語的には語的ふるまう点で接語といえる。接語 *zu* は、動詞の前の位置に生起するほか、名詞の前に現れる場合もみられる。Aikhenvald (2002)および Zwicky & Pullum (1983)では、接語の特徴として、どのような語幹にも接続する点を挙げている。

く、語幹との結びつきが強く形態的な緊密性を示す場合も一般的にみられることが観察された。特に本節で示した通り、分離前綴りが語幹と非分離前綴りの間に生じた場合、典型的な派生語としての性質を示しており、分離前綴りが接辞としてふるまっているといえる。続いて、分離動詞における過去分詞について観察を行っていく。

#### 5.4. 過去分詞における分離動詞の形態的緊密性

前節では、分離前綴りを含む派生語について、典型的な語としてふるまう事例について観察を行った。本節では、過去分詞における分離動詞の形態的緊密性について観察と検討を行っていく。分離動詞は、完了構文や受動文において、過去分詞の形で現れる。このとき、分離動詞において過去分詞を形成する接辞 *ge-*が語幹の前に生起し、分離前綴りと語幹が形態的に分断される<sup>16</sup>。

(47) Sicher, es handelte sich nur um Grünzeug, aber auch der liebe Gott hat nicht mit verzweifelten Menschen oder Paaren im Liebestaumel an-ge-fangen, (*Chez Max*)

(48) Ob du es glaubst oder nicht: Ich habe im Gefängnis wieder an-ge-fangen zu malen! (*Chez Max*)

(49) Da wird im Restaurant das Lieblingsgericht bestellt oder auf dem Markt fürs Abendessen ein-ge-kauft. (*Die Zeit*, 09.03.2000, Nr. 11)

(47)~(49)のように分離動詞が過去分詞を形成する接辞 *ge-*によって分断される現象は、一見して分離動詞の語性に反する事例であるように思える。すなわち、動詞を過去分詞の形に変え、語形成のプロセスを終了した後で分離前綴りが付加されているように思われる。しかしながら、過去分詞を形成する接辞は、屈折接辞のように語形成のプロセスを終了するものではなく、さらに新たな語を派生することが可能な点で、派生接辞であるといえる<sup>17</sup>。この点から、構造的には分離動詞が *ge-*による分断を受けていたとしても、語としての性質を保つことは認められる。なお、以下に過去分詞がさらに語を派生する事例を挙げてお

<sup>16</sup> 分離動詞における分断には、「統語的な分断」と「形態的な分断」があるとされており、前者は単独構文の主節にみられるように、分離前綴りと語幹が分離し、統語的に移動する場合である。後者は、本節で議論の対象にするように *ge-*や *zu* によって分断される事例を指す (中村 1995: 40)。

<sup>17</sup> なお紙幅の関係上詳しく述べないものの、*zu* 不定詞節において、語の途中に接語 *zu* が含まれる点 は分離動詞の語性に反するよう思える。一方 Aikhenvald(2002)では、接語が語の中に生起する事例として、ブラジル・ポルトガル語を挙げている。

(iii) *tire=me-n=lo* (throw=TO.ME:CLITIC-PL=IT:CLITIC) ‘throw this to me’ (Aikhenvald 2002: 53)

このような事例が観察されることから、*zu* 不定詞節における分離動詞も同様に語として考えることは可能である。



においても指摘されている。塩谷(2019)では、ハワイ語、タヒチ語、サモア語において、同一の語源から生じた要素‘eの形態的・統語的なふるまいの観察を行っている。塩谷(2019)によれば、‘eは数詞に付加される要素であり、伝統的には「分ち書きされるべき別の語（塩谷 2019: 72）」や接辞といった分析がなされてきたとしている。塩谷(2019)は、接頭辞 to‘a や ta‘i との共起において、‘eの観察を行っている。接頭辞 to‘a や ta‘i との共起はサモア語とタヒチ語においてみられ、ハワイ語にはほとんど存在しないとしているものの、サモア語とタヒチ語において‘eのふるまいが大きく異なっていることを指摘している。

- (55) e        to‘a-tolu teine oloo        tutu    i        ona luma  
 <一般> <人>-3 娘 <進行> 立つ<位置> 彼の 前
- (56) e        ta‘i-fa        faitotoa    i        le        fale    e        tasi.  
 <一般> <配分> 入口 <位置><定冠詞> 家 <一般> 1
- (57) to‘o    paē        tamarii    tei        faaea    mai.  
 <人> 5 子供 <関係詞> 休む <接近>
- (58) ta‘i        maha        tamari‘i    i        te        vaa    hoe  
 <配分> 4 子供 <位置> <定冠詞> 船 1

塩谷(2019: 75)一部改変

(55), (56)はサモア語の例, (57), (58)がタヒチ語の例として挙げられているもので、考察の対象となっている接頭辞 to‘a, to‘i および‘eに筆者が傍線を付したものである。サモア語においては、接頭辞 to‘a, to‘i によって e と語幹が分断されており、形態的・統語的に接語としての特徴を示している。一方でタヒチ語の場合には、‘eが接頭辞 to‘a, to‘i と交替しており、接語よりも接辞に近い性質を示しているとされる。なお塩谷(2019)では、e, ‘eについてサモア語においては接語・語として、ハワイ語では接辞として、タヒチ語ではその中間的性質を示すとしている（塩谷 2019: 78）。

以上のように、接辞と接語は常に明確に分類される要素ではなく、連続的な広がりを示しており、接辞と接語の両方の特徴を示す要素が存在していることが認められる。次節では、この点を踏まえてドイツ語の分離前綴りの位置づけについて議論を行っていく。

## 7. 分離前綴りの接辞性

本論ではここまで、分離動詞の諸側面および接辞と接語の性質についてみてきた。本節では、これまで見てきた分離動詞の性質を踏まえつつ、語の定義と性質についても触れ、分離動詞の語性の認定と分離前綴りの位置づけについて考えていく。



### 7.1. 語の定義と反例

まず語の定義としては、影山(1993)が四つの制約を挙げて説明している。語にみられる四つの制約とは、「形態的な不可分性」「統語的要素の排除」「外部からの修飾の禁止」「語彙照応の制約」である。このうち四つ目の「語彙照応の制約」については、3節において分離動詞がゼロ代名詞や形式動詞などで照応できない事例がそれにあたる。「形態的な不可分性」は、語が統語的な要素によって分断できないことであり、形態的緊密性と呼ばれる性質である。「統語的要素の排除」では、統語関係を示す要素が語の内部に生起できない点を挙げている。しかしながら、影山(1993)自身が指摘するように、「[テレビのスペシャル番組] 風」, 「[過去の人] 視され」のような「句の包摂」が観察され、反例となっている。江畑(2014)や江畑(2018)では、日本語、サハ語、トゥバ語において、統語的要素を含む語が指摘されている。

- (59) 最近 感謝を 忘れがちだ  
 (60) 現場を 知らなさに 驚いた<sup>19</sup>  
 (61) 文句を 言いたげな 様子

江畑(2014: 14)

- (62) *ariï-lar-daax küöl*  
 島-PL-PROP 湖  
 「島々を持つ湖」  
 (63) *kīīhir-bīt-tīī saŋar-ar*  
 立腹する-PST-SIM 話す-PRS:3SG  
 「彼(女)は怒ったように話す」

江畑(2018: 46-47)

宮岡(2002)においては、エスキモー語の語形成について述べられており、エスキモー語においては、文法関係を表す要素が接辞によって表され、日本語や英語において文相当に当たる内容を一つの語で表すことができる点を指摘している。

- (64) *qaya-pi-li-lua (< -lu-nga) pi-unga*  
 kayak-genuine-NV.make-SRD.1sg. do-IND.1sg  
 ‘I am making a genuine kayak’

宮岡(2002: 68)

<sup>19</sup> なお、江畑(2014)は(31)を文法的に許容されるとしているが、筆者(2000年生まれ、栃木県宇都宮市出身)の内省では、(31)は不自然な文である。

以上のように、語には一般に様々な制約がみられるものの、統語的要素を含むなど、これらの条件に反した語が存在するのも事実である。ドイツ語の分離動詞においては、エスキモー語のように統語的要素を含む語であるとみなせるかもしれない。しかしながら、ドイツ語の分離動詞は、語幹と分離前綴りに挟まれた要素が分離動詞の取る「枠構造」から出て位置を交替することが可能である。さらに、分離動詞の要素に挟まれた要素は、単独で発話可能な語であり、接辞とはみなせない。影山(1993)や江畑(2014, 2018)では、句に付く接辞のようなケースが指摘されているが、分離動詞においては、枠構造内と枠構造外で制約なく語の位置を替えられる点で異なる事例であるといえ、分離動詞が大きな語を形成しているとは言えない。

(65) a. Meine Schwester setzt den Fluss über.

b. Den Fluss setzt meine Schwester über.

その川を私の姉が渡っている。

(66) a. Anna spricht Freundin von ihm an.

b. Freundin von ihm spricht Anna an.

彼女の友達にアンナが話しかけている。

この点から、分離動詞は一見して句であるように思える。しかしながら、4節でみたように他の要素によって分離動詞の構成要素を照応することはできない。さらに、5節においてみたように、分離前綴りが非分離前綴りとともに語幹に付加された場合、接続の順序によっては分離・移動がみられず語としての一体性を示している。この点から、分離動詞を二つの語から構成されるとみなすのは簡単ではない。次節において、接辞と接語の性質について再度触れ、分離動詞の語性と分離前綴りの形態法、統語法における位置づけについて考えていく。

## 7.2. 分離動詞の語性と分離前綴りの位置づけ

接辞と接語の違いについては、Aikhenvald(2002), Zwicky & Pullum(1983)を始め、江畑(2022)でも触れられている。分離前綴りの性質として、意味の変化、統語法と形態法上でのふるまいについては、5節において観察してきた。ここでは5節での観察に加えて、分離前綴りにおける語幹選択性について触れておく。分離動詞を形成する分離前綴りは、基本的に動詞に付加され、その他のカテゴリーの要素には付加されないと考えられる。

(67) a. Abschied 「別れ」, Ankommt 「到着」, Aufgabe 「役割」

- b. ab|scheiden 「分離する」, an|kommen 「到着する」, auf|geben 「従う」  
 (68) a. ausdrücklich 「明らかな」 (<aus + \*drücklich<sup>20</sup>, aus-drucken + -lich)  
 c. nachhaltig 「持続可能な」 (<nach + \*haltig, nach-hallen + tig)  
 b. aufmerksam 「注意深い」 (<auf + \*merksam, auf-merken + -sam)

以上の例は、分離前綴りと同じ音形を持つ接辞が現れている事例である。(67)の例は、分離前綴りが名詞に付加されている事例である。これらは、動詞から派生した語であるため、分離前綴りが直接名詞に付加されているとはみなせない。(68)も同様に、分離前綴りが名詞などの要素に付加されているように見えるが、分離動詞を除いた要素が存在しない語であるため、動詞に付加されたのちに名詞や形容詞に派生したと考えられる。加えて分離前綴りは、動詞以外の要素に付加された場合に動詞と異なり分離・移動するという性質を示さない。この点から、分離前綴りがほかの品詞語幹に付加されているとは認めがたく、分離前綴りとこれらの接辞は異なるものであると考えられる<sup>21</sup>。3節で触れた接辞と接語の性質および分離動詞の性質を対照させると表4のようになる。なお、参考として語の性質についても表に反映させている。

**表 4 語、接語、接辞の性質と分離前綴りの性質の対照**

	語	分離前綴り	接語	接辞
単独発話	○	× <sup>22</sup>	×	×
アクセントを持つ	○	○	×	×
意味の変化を起こす	—	○	×	○
語幹選択性	—	○	×	○
統語法で扱われる	—	△ <sup>23</sup>	○	×
形態法で扱われる	—	○	×	○

<sup>20</sup> 独語辞典 Köster (1969)において\*drücklich, \*haltig, \*merksam といった語は存在しないため、分離前綴りは形容詞に付加されないと思われる。

<sup>21</sup> 本論で扱っている分離前綴りと動詞以外に付加される同形の接辞は異なるといえる。なお、『アクセントと独辞典(第3版)』では、両者を異なる接辞として扱っている。さらに、独語辞典“Ullstein Lexikon der Deutsche Sprache”では、各分離前綴りについて‘trennbare Vorsilbe von Verben.’「分離可能な動詞の接辞」とされている。なお、動詞に付加される場合と名詞・形容詞などに付加される接辞を同じものと認めた場合においても、形態的緊密性を示し形態法のレベルで扱われるべき存在であるため、接語とみなせないといえる。

<sup>22</sup> ドイツ語コーパス (DWDS) で調べたところ、単独で用いられていると思われる例は見つからず、必ず語幹を伴って発話される。

<sup>23</sup> 主節平叙文中では、語幹から分離し、語幹との位置を取りかえることで自立語的にふるまうため、ここでは△とし統語法に全く従わないとはいえないと考える。

以上の観察を踏まえて分離動詞の語性と分離前綴りの位置づけについて考えてみる。分離動詞は、一見して句のようにふるまうものの、単独構文の主節以外の環境や、非分離前綴りを含む語において形態的緊密性を示す点が認められる。分離前綴りに注目すると、語幹の選択性が認められ、動詞以外の語幹には付加されないと考えられる。さらに、語幹に付加された場合に全体として一体性を持った融合的な意味を生じさせる点や、アクセントが語幹を含めて一つに統合される点で接辞としての性格を強く示しているといえる<sup>24</sup>。一方、分離動詞において単独構文の主節で分離・移動する現象を無視するわけにはいかない。この現象は分離動詞、分離前綴りにおいて重要な側面といえるからである。本論では、6節において、接語と接辞の中間的存在について確認した。分離前綴りは、単独構文の主節において語のようなふるまいを見せる点で接語的性質を有しているといえる。したがって、分離前綴りは接辞と接語の中間的カテゴリーとして位置づけられ、その性質から基本的には接辞としての性質が強いといえる。この点から分離動詞は語に近い存在といえ、分離前綴りは接語的な接辞と分析できる。

## 8. おわりに

本論では、分離前綴りにおける接辞的側面と接語的側面について検討を行ってきた。分離前綴りは、動詞に付加されて分離動詞を形成する。分離動詞は単独構文の主節において分離・移動するという性質を示す。このような点から、服部(1950)などにおいては分離前綴りと語幹の両方も語であるとされてきた。英語の句動詞との対照においては、分離動詞がより句としての特徴を示す点で、一見して二語から形成されるように思われた。一方日本語における「Nする」型複合動詞との対照においては、照応や省略ができないことが観察された。この点から分離動詞が二つの語から構成されるとは認めがたいといえる。この観察を踏まえつつ、4節においては様々な環境における分離動詞のふるまいを観察した。その結果、分離動詞は全体で語のようにふるまっており、分離前綴りが接辞的な特徴を示すことが示された。5節においては、接辞と接語の相違点および両者の特徴を示す中間的存在に関する事例を参照した。これを踏まえ、分離前綴りの位置づけを行った結果、分離前綴りは基本的に接辞としてふるまうものの、単独構文の主節において分離・移動するという特徴を示すことから、接辞と接語の中間的要素と分析できる。さらに、分離前綴りの性質と形態的緊密性を示す点から、分離動詞を語に近い存在と分析した。

<sup>24</sup> 分離前綴りは、単独構文中で分離した際、独自のアクセントを持つ点で語としての性質がみられるものの、これまで見てきたとおり、分離前綴りを語（自立語）とみなすことは難しい。

## 略号一覧

ACC: 対格, IND: 直説法, NV: 動詞化辞, PL: 複数, PROP: proprietive, PRS: 現在, PST: 過去, SG: 単数, SIM: simulative, SRD: 従属法

## 用例出典

本論の例文において特に記載のないものは、筆者の作例である。ただし、英語・ドイツ語における例文は一部母語話者による内省により判定を受けたものを用いた。さらにドイツ語の例文において作例以外のものは、ドイツ語コーパス“DWDS Textkopora”により検索したものを用いた。出典は「書名, 著者, 発行所, 発行地, 発行年」の順に記載している。

*Anmerkungen zu Adenauer*, Schwarz, Hans-Peter, Deutsche Verlags-Anstalt München, 2005.

*Chez Max*, Arjouni, Jakob, Diogenes, Zürich, 2006.

*Die Arbeit der Nacht*, Glavinic, Thomas, Carl Hanser Verlag, München Wien, 2006.

*Die Liebesblödigkeit*, Genazino, Wilhelm, Carl Hanser Verlag, München, Wien, 2005.

*Die Zeit*, 20.01.2000, Nr. 4

*Die Zeit*, 09.03.2000, Nr. 11

*Kultur und Politik*, Lepenies, Wolf, Carl Hanser Verlag, München, Wien, 2006.

*Ladylike*, Noll, Ingrid, Diogenes, Zürich, 2006.

*Lila, Lila*, Suter, Martin: Diogenes, Zürich, 2004.

*Neue Leben*, Schulze, Ingo, Berlin Verlag, Berlin, 2005.

*Skogland*, Boie, Kirsten, Ort, Hamburg, 2005.

*Unter den Linden*, Bruyn, Günter de, Siedler, Berlin, 2002.

*Vom Wasser*, Düffel, John von, dtv, München, 2006.

*Wörterbuch*, Erpenbeck, Jenny: Eichborn Verlag, Frankfurt am Main, 2004.

## 参考文献

今西一太 (2008) 「アミ語の接語・接辞の分類に関する試論」『東京大学言語学論集』39, 99-118.

江畑冬生 (2014) 「統語的派生再論」『人文科学研究』135, 1-20.

——— (2018) 「統語的要素を入力に含む派生にみる語彙的緊密性 (lexical integrity) の問題」『東京大学言語学論集』39, 41-53.

——— (2022) 「言語類型論から見た日本語の動詞形態法と統語的派生」『言語の普遍性と個別性』13, 23-50.

影山太郎 (1993) 『文法と語形成』ひつじ書房.

- 在間進 (2010) 『アクセス和独辞典 第3版』三修社.
- 塩谷亨 (2019) 「サモア語、タヒチ語、ハワイ語における接語と接辞の区分について——サモア語・タヒチ語の接語 e とハワイ語の接辞‘e——」『室蘭工業大学紀要』68, 69-81.
- 嶋田裕司 編 (1985) 『新英文法選書 5 句動詞』大修館書店.
- 中村直子 (1995) 「分離動詞の認定をめぐる諸問題」『研究報告』8, 39-67.
- (2013) 「分離動詞と「語」の概念」『言語文化学研究』8, 45-54.
- 信岡資生, 荻原耕平 (2016) 『独検対応 クラウンドイツ語単語 1600 CD 付き』三省堂.
- 服部四郎 (1950) 「附属語と附属形式」『言語研究』15, 1-26.
- 宮岡伯人 (2002) 『「語」とは何か——エスキモー語から日本語をみる——』三省堂.
- Aikhenvald, Alexandra. Y. (2002) *Typological paraments for the study of clitics, with special reference to Tariana*; R.M.W. Dixon and Alexandra Aikhenvald (eds.) *Word: a cross-linguistic typology*, Cambridge University Press.
- Fleischer, Wolfgang; Barz, Irmhild (1995) *Wortbildung der deutschen Gegenwartssprache*. Max Niemeyer Verlag.
- Grebe, Paul (1966) *Der Große Duden Grammatik: der deutschen Gegenwartssprache*. Duden.
- Köster, Rudolf (ed.) (1969) *Ullstein Lexikon der Deutschen Sprache*. Ullstein.
- Paul, Hermann; Stolte, Heinz (1962) *Kurze Deutsche Grammatik*. Max Niemeyer Verlag.
- Zwicky, Arnold M.; Pullum, Geoffrey K. (1983) Cliticization vs. Inflection: English N'T. *Language*, Vol.59, No. 3, 502-513.
- Zwicky, Arnold M. (1985) Clitics and Particles. *Language*, Vol.61, No.2, 283-305.